

事例研究から見る学びと活動の循環について

—生涯学習経験者の体験から読み取る—

大久保 隆
井上 晶子

現在多くの学習の場が提供され、人々の学びへの意欲も盛んである。とくに高齢者にとって生涯学習への取り組みをウェルビーイングの観点から捉えた場合、生きがい、自己充実、楽しみなどとしての学習とともに、学習を通して得た知識やスキルさらには人間関係を地域社会の課題解決などに向けて活かすことに大きな意義がある。2021年度に行ったアンケート調査結果から、主に高齢者の場合、学習した結果が地域社会に貢献する活動として十分に活かされていない実態が明らかとなった。

この結果を受けた2022年度の当研究では、学習や地域活動を行う、あるいは活動を目指す人を対象に、活かされる学習、学習から活動に向けて、あるいは学習と活動の循環に必要なとされる要因を明らかにすることを目的とし、聞き取り調査を実施した。その結果の定性分析およびテキストマイニングによるその特徴把握と可視化により、①情報、人、組織等をつなげるプラットフォームの構築、②主催者と講師に求められる、明確な講座主旨や縦と横の関係づくりの場としての講座設計、③講師と受講生が持つ資源を相互に活かしたアクティブラーニングの導入、④リタイア後の地域へのソフトランディングの視点に立った行政と企業の相互連携について提言を行った。いずれの提言も、人々のつながりやコミュニティの機能が希薄化する地域社会におけるプロダクティブエイジング、そしてウェルビーイングにつながる要素である。

キーワード：学びと活動の循環、プラットフォーム、企業と地域貢献活動、
テキストマイニング、ウェルビーイング、プロダクティブエイジング

1 はじめに—本研究の背景

最近よく目にするようになった古くて新しい用語「ウェルビーイング (well-being)」は、1946年、世界保健機構 (WHO) が初めて使用した言葉である。人の身体的、精神的、社会的に満たされた良好な状態を指し、持続的な幸福感や生活満足感につながるものとされており、SDGsの第3の開発目標にとりあげられている「すべての人に健康と福祉を」はこれにつながる。近年この言葉への関心の高まりは、コロナ禍のパンデミックや不安定な世界情勢、我が国の経済状況の先行き不安とも関連していると考えられる (前野 2022 : 323-30)。

ウェルビーイングとは暮らしの満足度、幸福度でもある。川崎市民を対象にした調査から、市民

の地域意識や地域コミュニティへの関与の度合 (関係性) が生活満足度に及ぼすことが明らかにされている (神原 2015:23-38)。

また都市部における地域在住高齢者を対象としたプロダクティブ活動 (ボランティア活動等) とウェルビーイングとの関連調査においても、両者の関連性が明らかにされている。女性では家庭内無償労働を除くプロダクティブな活動がウェルビーイングを高め、男性では有償労働やプロダクティブな活動や役割を持つことが主観的健康度につながるということが明らかとなった。特に女性高齢者がプロダクティブな活動に関与する環境を得た場合、本人のみならず地域社会にも利益がもたらされる可能性があると考えられている (岡本 2009:723-33)。

本研究はこれからの少子高齢社会の地域力維持

にとって高齢者のパワーが重要と考え、プロダクティブエイジングの観点から高齢者の社会参加を捉えている。

2021 年は健康寿命延伸とともに盛んになる高齢者の学習行動と、その受け皿として多様な学習機会が提供されている現在、学習が地域に寄与するプロダクティブな活動につながっているのかを知るためのアンケート調査を行った（大久保・井上・小高 2022）。アンケート調査の結果、学習が活動につながりにくい現状にあること、及び両者の分断がなぜ生じているのかを受講者、学習提供者の両側面からの考察を行い、学習と活動の橋渡しとして必要と思われる提言を仮説的にを行った。

2022 年度の研究はその実態をより詳細につかむためのインタビュー調査による事例研究を行った。学びから活動につなげるには何が必要かを各対象者の現在に至るまでの語りを通じて明らかにするものであり、いわば 2021 年の仮説の検証から具体的提言へとつなげる試みである。

なお、以下の記述において 2021 年度の研究を「研 1」、当 2022 年度の研究を「研 2」と称する。

2 研究の目的と方法

2.1 研究目的

学習と活動をつなぐブリッジについて行った

2021 年度の提言（見解）を仮説として位置づけ、事例対象となった経験者の実態を通して検証することが目的である。

その際、次の 3 つの視点からのリサーチを行う。

- ① 社会参加活動としての学習と活動への取り組み方と各自の見解
- ② 対象者にとって、学習と活動の橋渡し（ブリッジ）となった要素とブリッジに関する見解
- ③ 高齢者の社会参加活動に対する見解

2.2 研究方法

学習や地域活動を行っている人を対象に、インタビューを通じて行う事例調査研究である。

◇調査方法：インタビューは半構造化面接による。

2.3 調査について

◇調査内容：①最初に体験した地域活動と学習、

②現在の活動と学習、③就労状況、④元気高齢者の地域活動に関する考え、⑤学びを地域活動につなげるために必要なこと。

◇調査対象：表 1 に示す 9 名を対象とした。

インタビュー時間は概ね 90 分程度であったが、各自の語りは活発であり、予定した問いかけが十分行えない場面も多かった。なお、聞き取り調査に当たっては、内容に偏りが生じないように主たる

表 1 対象者の一覧表および年齢別男女別数

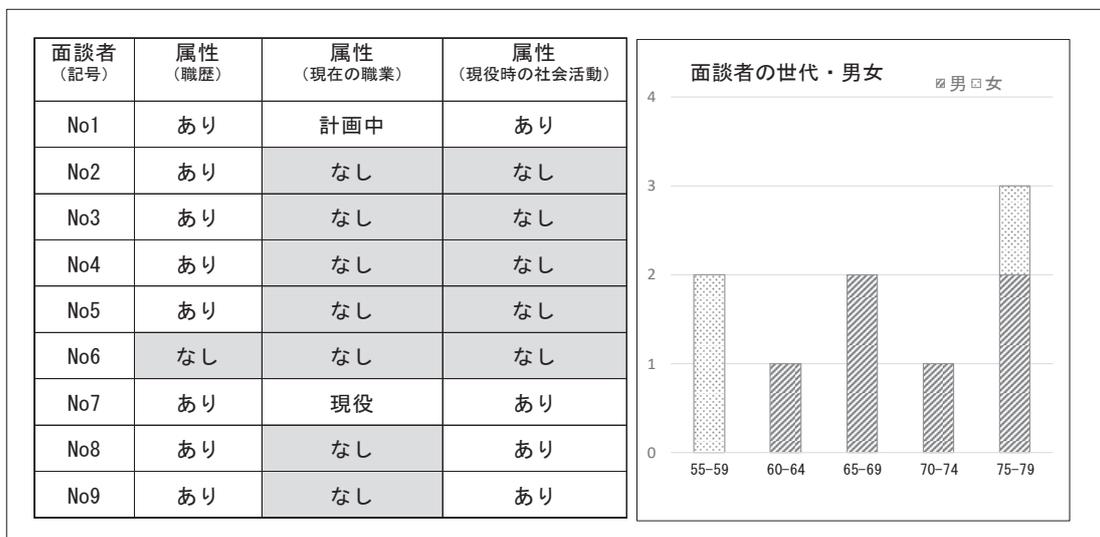


表2 面談者の特記事項

NO	学習と活動の展開	両者のつながりに関する考え・意見・提言	高齢者の社会参加活動	その他特徴的な考え行動
No1	・現状を知るための学び直し（学生の頃の学びから） ・学び目的意識の明確化→活動拡大 ・学習と活動の同時併行と循環	・目的のある学習 ・各場面の緩やかな人のつながりと具体的情報 ・各活動をつなげるコーディネーターとしての行政	・高齢者と子ども、若者とのつながり重要→これからの高齢者予備軍は地域へ	・明確に焦点化された学習と活動の展開から新たな創造的活動へ
No2	・行政公募の委員が活動のはじまり→その後学習と活動の併行 ・現役時代の知識を活用した子供対象の活動と居場所づくりが中心 ・既存組織と自らによる組織での活動	・学びのインプットから活動のアウトプットへ ・活動への橋渡しは身近な人の後押し ・自由な情報交換から試みから活動へ ・理論のある講師と、実体験を持つ受講生の意見交換の時間が重要	・高齢者の役割：地域の人を育てていくこと、子供たちに文化を伝える役割	・新しい居場所づくり、話し合いの場づくりの試みを重ねる ・学習の場は、考えを広げ、つながりを作る場
No3	・漠然と多くの趣味的・教養的講座→活動につながる意図的な講座選択→活動への道筋	・受講生の問題意識 ・講座提供者の意識 ・講師の姿勢 ・意欲のある人には学習がチャンスとなる	・外に出る機会を得る仲間づくりの重要性を強調	・学習も活動も仲間づくりにとっていいと、漠然とした動きの中で得たものを意味づける
No4	・リタイア後何かをしなければと模索の時期→学習から得た興味関心、仲間の情報から得たヒント→学習仲間と新たな活動と組織づくり→活動の広がり	・具体的情報とそれ受けとる「アンテナ」 ・活動につながる実践的学習：ともに行動することで一体感が生まれ、目標が見えてくる ・具体的情報の交換が行われる学習仲間 ・講師の役割は、いかに行動につなげるか	・高齢者の地域貢献活動はコミュニティの維持であり、本人の維持でもあると考える	・模索の時期になんでもいいと行った庭掃除の場所と人のつながりが、活動をスタートするきっかけ
No5	・現役時代の経験と趣味→活動へ ・個人的興味関心→学習→活動へ ・広く浅く、単発的な活動 ・中心的役割、積極的、継続的な活動	・講師の魅力と他にはない講座のテーマ ・思いと仲間と第三者の後押しと成功体験→活動 ・そのための出会いの機会が重要 ・動機を持った学習、仲間意識が自主的な社会活動に結び付く	・居場所づくりときっかけづくりの重要性	・自らの活動を、「自分が好きで楽しんで」「四角四面のしゃかりきの学習や活動はやっていない」と自分の活動や学習を評価
No6	・学習のはじまりは再就職に役立つ講座→人とのつながりを目的とした趣味的な講座（保育施設があれば何でも） ・活動募集チラシが活動参加の契機になった	・意図を持った講座を設ける ・受講中のタイムリーな情報は活動への後押しになる ・受講生同士の交流の場→自由な話し合いから何をやりたいかが見え、後押しがあると次の一歩に	・高齢者は、活動しなくても、元気に過ごせばいい ・元気な人はもったいないから家でできることを	・地域で活動するには退職してからでは遅い ・若い時はネットワークが多いので活動に結び付きやすい
No7	・資格を目指しての学習と専門性を高めるための学習を重ねる ・学習と併行し、資格をダイレクトに活かした個人的活動の展開	・情報を広めるインフルエンサーが必要 ・受講者、主催者、講師が対等な立場で相互連携と意見交換→指導する側とされる側の循環が必要 ・講師の質と主催者による講師の適切な選択	・地域活動をやりたい人がやればいい ・やりたいがやり方がわからない人への支援は必要	・高齢者の現状や生涯学習の現状に厳しい視点を持つ ・活動は個人的で、仲間やつながりに関する話はない
No8	・リタイア後の学習と活動は現役時代の仕事の延長線上に→その後の学習内容、活動の方向性は多様化し一貫性、連続性はとくにみられない		・今は地域貢献を考える時代かもしれない ・現役時代、こんなことがあると見せることができれば	・遠方に居住する両親への対応から活動が制限される現状 ・「母体となる活動がなく、探している」状況
No9	・早期リタイア後の暇つぶしの学習→学習の広がり ・人とのつながりから活動→活動の広がり	・学習の場は、共通課題のグループワークによる仲間づくりの場として必要 ・現役時代からの地域とのかわりが必要 ・学習への帰属意識が仲間意識を醸成し活動に生きる ・情報をアクティブに捉える姿勢が必要		・学びは後の活動に生きてくる→広く、浅く、多く学ぶのがよい ・あちこちに顔を出す→人の輪の広がりが活動の機会となる

インタビュアーと補佐役の計2名が行い、他に記録担当1名が同席している。正確を期するためインタビュー対象者の了解を得たうえで録音を行った。

2.4 調査結果の分析方法

2.4.1 事例分析

語りの文脈の中から、①学習と活動の展開に関すること、②両者のつながりに関する考え・意見・提言、③高齢者の社会参加活動について、④各事例の特徴的な考えに分類し、それぞれの傾向・特徴を把握する。

2.4.2 テキストマイニングによる補完分析

①テキストマイニング：定性的なテキストデー

タを数値化することで定量的に分析するための手法である。今回インタビューで得られた直接的解釈を補完し、仮説を検証するために使用した。

②使用した分析ツール：計量テキスト分析で用いられている KHCoder3 を使用した。(KHCoderとは、計量テキスト分析またはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。出典：<https://kncoder.net/>)

2.5 倫理規定について

各インタビューに先立ち、研究の主旨、インタビュー内容、結果と個人情報との守秘に関する取り扱いを、書面「聞き取り調査へのご協力依頼」で説明し、研究に関する理解を得た旨の署名を受領

して進めた。また、事前に「調査計画書（研究倫理確認用）」をまちづくり研究員事務局に提出し了解を得た。

3 調査結果の分析

3.1 質的読み取り—事例分析

①それぞれの語りの中に見られた学習と活動の経緯と現状等に関して、各項目別に特記事項を整理した¹⁾（表2）。

分析に当たっては、共通する意見内容から一般化できる傾向を把握するとともに、独自の意見に関しては個人属性や現状との関係から文脈を踏まえた解釈を行っている。

②各事例のグループ化：インタビュー結果に基づき、学びと活動の観点から各事例の特徴を明確にするため事例を4つにグループ化した。

グルーピング結果を図1に示す。学びの傾向を横軸に、活動の傾向を縦軸に置く。学びの軸では、何を学びたいかの焦点化が曖昧な学びや自己充足

的な学びと、目的性を持った社会的な課題に結び付く学びを両端に、また活動軸では趣味といった類の自己充実の活動から、自主的、地域・社会貢献的活動を両端においた。第1から第4象限のいずれかに各事例を位置付けている。小数字は各事例の学びや活動を始めたスタート時点のおおよその状況であるが、時系列的にみた場合、変化は一方向に変化するものでなく人それぞれである。より特徴的と思える象限に位置付けており、属する象限は価値を表現しているものではない。

3.2 質的読み取りと定量的読取り—アプローチ1+アプローチ2

各グループで代表的と考えられるNo1、No9、No3、No5についてその特徴を記述し、客観性を得るため各事例のテキストマイニングによる共起ネットワーク図から読みとった内容と比較検証した。図2に示した「アプローチ1+アプローチ2」の試みである。

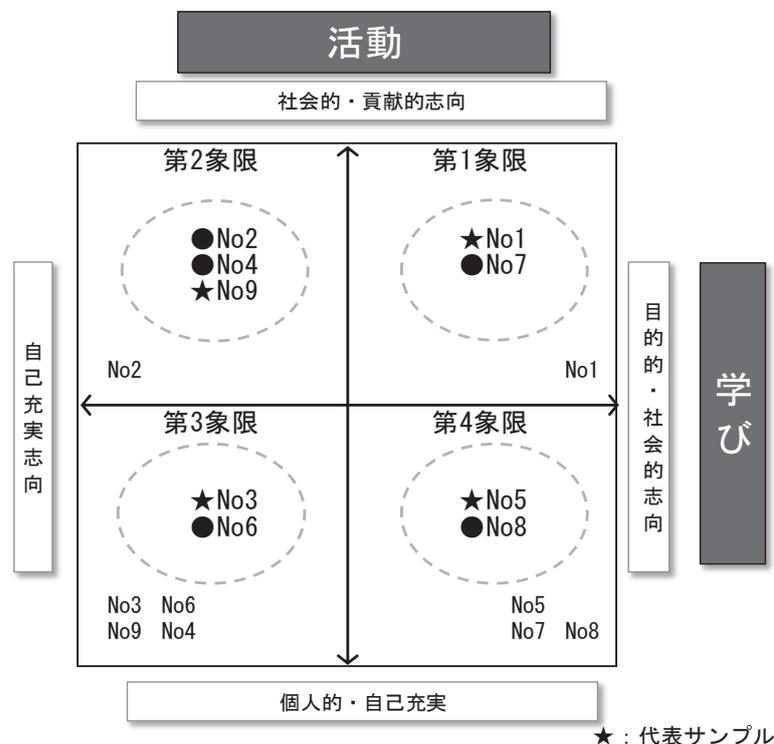


図1 学びと活動の2軸によるグルーピング

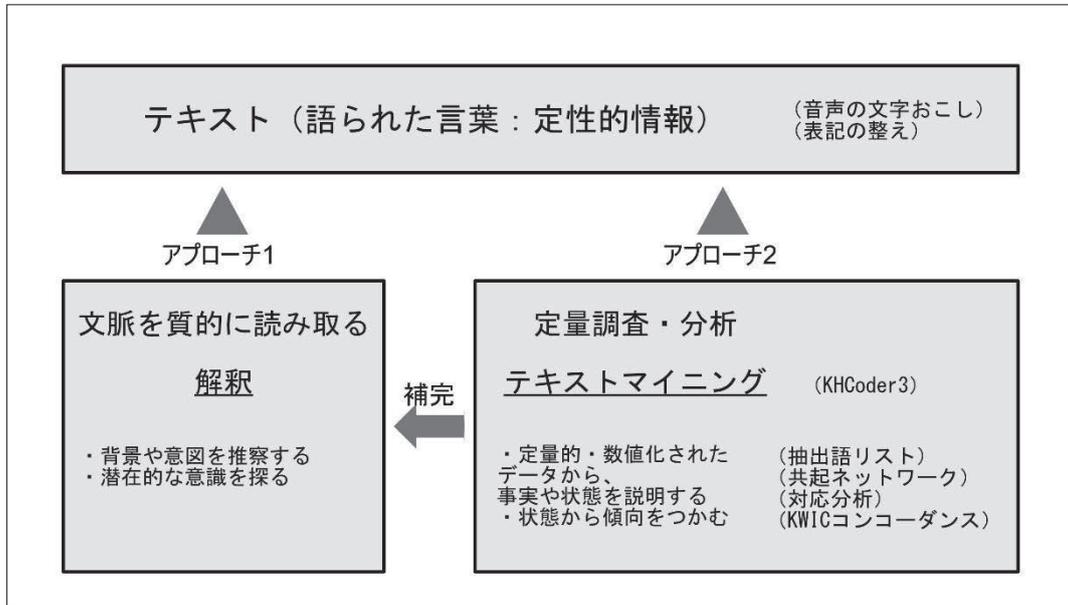


図2 インタビュー分析の2つのアプローチ

3.2.1 第1象限：No1

(1) 質的読取り

海外生活をきっかけに日本の現状を知りたいと「学び直し」を始める。人とのつながりを求めて講座や集まりに顔を出すことを重ね、学習と活動目的の焦点化がなされる。目的意識を持ち、広い視点で地域の課題を捉えることで既存の組織での活動を経て、仲間と新たな組織を立ちあげ活動を始めた。これらの経過・経験に基づき、①目的意識を持った学習、②緩やかな人のつながりを通じて、地域課題や活動グループなどに関する具体的な情報交換が重要と述べている。また、グループ間のつながりや市民活動と企業とのつながりを進めるにあたって、③行政がコーディネーターの役割を果たすことが提唱される。

人口減少、高齢化の進行する地域社会にとって「地域の高齢者が子どもや若者とつながっていること」が重要であり、「これから高齢になる若い世代が地域に出ていくこと」が必要であり、「いかに若者を取り込んでいくか」が課題との考えを持つ。若者の働いている世代の地域へのソフトランディングにとって、④緩やかなつながりの場⑤働いている人たちも参加できる学びの場（オンライン、夜間等）の必要性が語られる。

活動と学習の経緯には、目的性を持ち、イノベティブな活動に移行する特徴が見受けられる。

(2) 定量的読取り（図3）

KHCoderの共起ネットワーク結果による読取りであり、グループ分けがわかりやすいように図中に点線で区切りをいれ、読み取れるまとまりの言葉を記載した。

海外生活に基づいた課題意識、環境や子供たちへの関心のある言葉が多く、福祉関連の学習やグループ作り、情報交換の要望に関する言葉が多いのが読み取れる。

3.2.2 第2象限：No9

(1) 質的読取り

地域活動としてはスポーツチームの後援会に入り、チームの地域貢献活動の一環としてのボランティア活動に加わったのがスタートである。学習は「暇つぶし」に大学の社会人講座を受講したのが始まり。併行して活動を前提に各種のいわゆる「養成講座」へ参加、行政主催の活動への関わりといった具合に活動の範囲を広げる。「自分が一体何をやっているのかわかんなくなりつつあるんです（聞き取り調査時点）」と表現されるように、「面白そうだから」、「関係あるから」と興味のわい

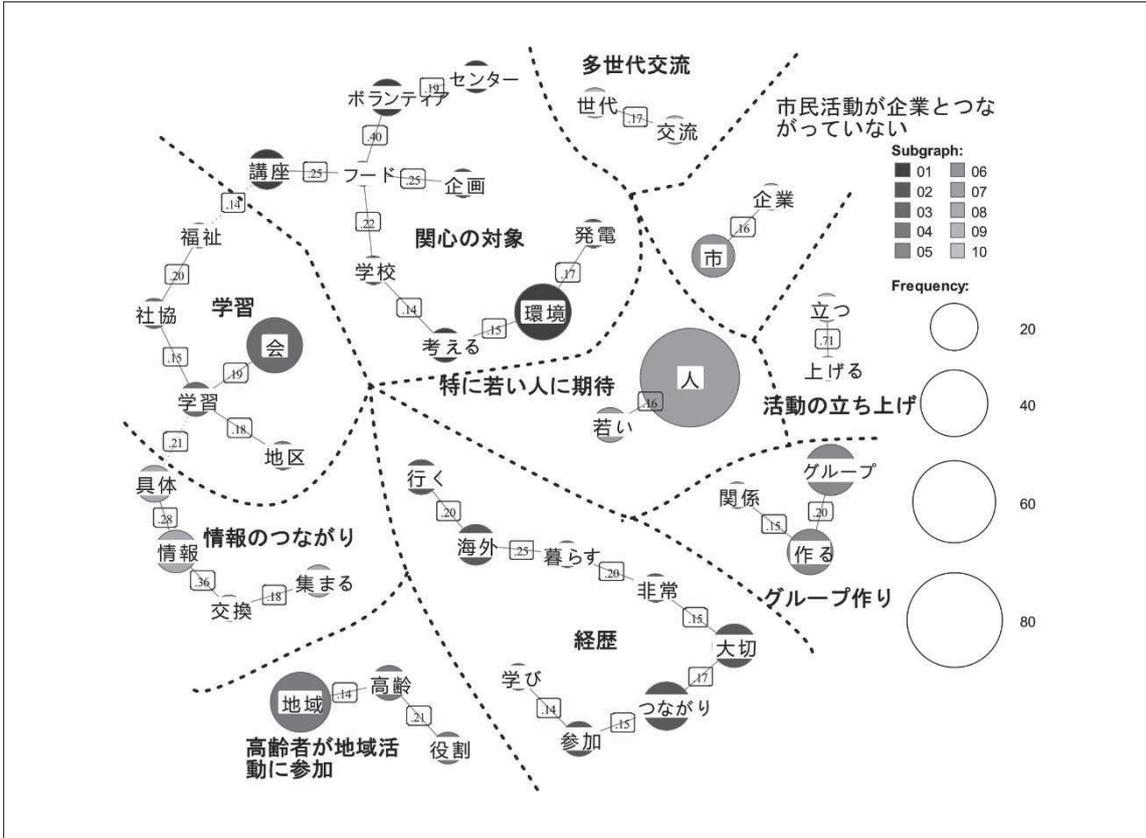


図3 No1の共起ネットワーク

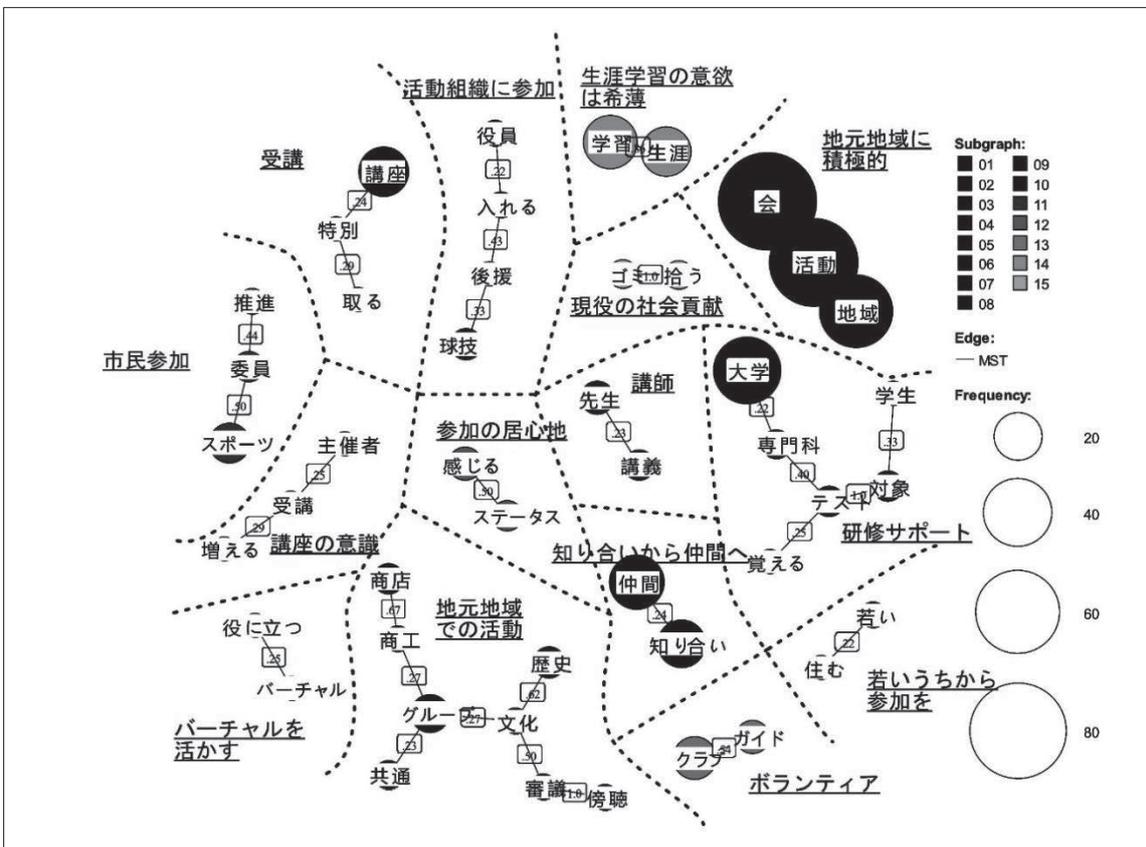


図4 No9の共起ネットワーク

たものには何でも参加（顔を出す）する活動の結果の広がり、多様性でもある。自己啓発の学習機会を積極的に求めるが、収入が得られる研修協力を除いては学習と活動の直接的つながりは少なく、人とのつながりを介して活動の広がりが多様化する。

「学習は、後々の活動に生きてくる」と学習の意義を捉え、学習の場ではグループワークなどを通じての「仲間づくり」、精神的なきっかけと活動の場に出るきっかけづくり、受講生のアクティブに情報をキャッチする姿勢が重要と述べる。

活動につなげるにはイベントでの実体験活動を通じて、活動を伝えていくのがその気にさせる、活動は「あちこちに顔を出すことで誘われどんどん広がる」と、自らの経験をもとに「実体験」と「仲間」、「仲間意識」の意義を語る。ここでの仲間意識はそれぞれの場所で同じ活動をしたとか、出会った中学時代の旧友であったりする。また、仲間意識は学習の場や活動の場の「ステータス」を感じることで高められる（ステータスを感じない町内会、感じる社員研修を例に帰属感とも説明している）と述べ、本人の現在の活動や学習機会の選択に結び付いていると考えられる。

65歳定年時代、「働いているうちから地域に片足を突っ込むようなことをやっていないと地域に入りにくい」と現役時代からの地域とのかかわりの必要性を述べる。

(2) 定量的読取り (図4)

地元地域との生活の接点や活動についての言葉が多く、地域貢献への取り組み意識は高く、参加している組織が多い。学びは活動の内容に直接的に沿ったものより、仲間づくりのための傾向が読み取れる。

3.2.3 第3象限：No3

(1) 質的読取り

リタイア後、明確な目的がはっきりしないまま「なんかやることないかな」と、趣味的な講座、教養的な講座を数多く受講する。そうした経緯の中で自分の住む町をよくしたいとの思いが講座と

結びつき、結果として活動に結び付く。活動はメニューを提示されたり、誘われて、声をかけられて、など周囲の誘い、後押しによってスタートが切られた。

学習は意欲のある人には活動につながる「チャンス」、そして「学習も活動もそれだけで仲間づくりの大きな意義、手ごたえがある」と言う。たとえ目的が明確でない学習のスタートであっても、学習の意義についての認識には意義があるとし、人への関心を持ち続けることによって新たな動機が生まれ、地域にかかわる活動に結び付くこと、そこでの人のつながりの大切さなどの学習の意義を捉えている。

自らが生涯学習の仕事にかかわっていたこともあり、目的や動機が曖昧な「学習のための学習」を厳しく指摘し、主催者の「地域の人財を育てる」意識や講師選択の曖昧さ、講師の活かす学習への「意識や情熱の乏しさ」などが活動に結び付かない学習となっていると強く述べる。受講生、主催者、講師の意識、「三つが揃わない」と言及している。

(2) 定量的読取り (図5)

講座、主催者、講師などの受講体験に関する思いや意識の言葉が多くみられ、ボランティアなど活動に関する言葉少ないことが読み取れる。

3.2.4 第4象限：No5

(1) 質的読取り

現職時代から趣味を中心とした活動を行っている。リタイア後、学習では特定の講座への長年にわたる参加、活動ではリーダー的役割を担い深く長く続ける活動と単期間で中断するものもあるが、非常に多くの活動にかかわって来た。自らの興味関心が動機となって受ける学習から、学習を自ら企画し中心になって実施する活動も展開する。「自分が好きで楽しんでいて、四角四面のシャカリキの地域貢献云々というものはやっていない」と述べる。一方、自分が主体となって進める活動については「自分が好きで楽しむ社会活動」と位置付け、その内容や自分の思い、そこから考える社会

的課題等について熱心に語る。

「個人的なことから出発して、講座を受けることによって社会的な活動に結び付いていく」「誰かに言われてではなく、まず自分で自主的に活動を」と、個人的な思いから出発する（動機とする）学習が、仲間を得ることや、自主的な社会活動に結び付くことが述べられる。

高齢者の社会参加についても同様に、地域活動も趣味で好きなことをやるのも良しとする、両論を持つことを前提に、「最初の一步を踏み出すための第三者の後押し」「いろいろな出会いがあればチャンスがある」と、活動に向けての、きっかけづくりと居場所づくりの重要性の説明が続く。

常に物事を客観視しながら両側面から言及する。行動面としては選択と集中が明確であり、場面に応じて関わり方がはっきりと異なる。

(2) 定量的読取り (図 6)

仲間づくり、グループ作りの言葉や興味および自ら立ち上げた学びの言葉が多くみられる。地域における高齢者の立場や活動に関する言葉も多く、種々の活動を同時平行的に行っていることが読み取れる。

4 考察—活動実践者の声・考えから

4.1 学習と活動の連鎖について—学習と活動の双方向性

研1のアンケート調査では、学習から活動に向かう一方方向性を想定し、学びの諸特徴と活動への流れを見た。そして、学習の結果が活動に結び付

いていないことを指摘し、両者を結びつけるものは何かの考察を行った。

研2の聞き取り調査では、

- ① 学習によって活動への目的が生れ、活動が始まる、あるいは深化する (No3, No4)
- ② 活動をすることから明確な目的のもとに学習行動が生じる (No1)
- ③ 学習と活動が同時併行的に進められ、相互に関係がある場合 (No7)、関連性がない場合 (No6) が見られる
- ④ 学習から始まった活動の広がりとともに学習へのかかわり方が広がり、学習を終えた (No4)、新たな学習に向かった (No9)

など、学びと活動の流れには様々なパターンがあり、活動と学習は双方向的に関係している実態が明らかとなった。

研2の①の概念は研1で得られた概念と同様な図7であり、さらに研2の②や③のような結果から、双方が連鎖循環する概念は図8となる。学習機会や提供内容が多様化し、また学習リピーターが多い現状では学習と活動の連鎖循環を示す概念でとらえていく必要がある。

講座提供に当たっては、この学習と活動の連鎖循環ならびに併行を伴う学習と活動の双方向性を前提とした講座設計が求められる。現行のテーマの多様性に加え、学習を求める者が各自の学びと活動の循環の時期にあった学習選択ができるような、学習方法や学習内容の提供を行う段階にあるのではないだろうか。

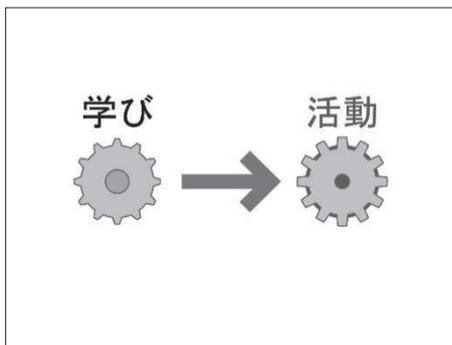


図7 学びと活動の一方方向イメージ

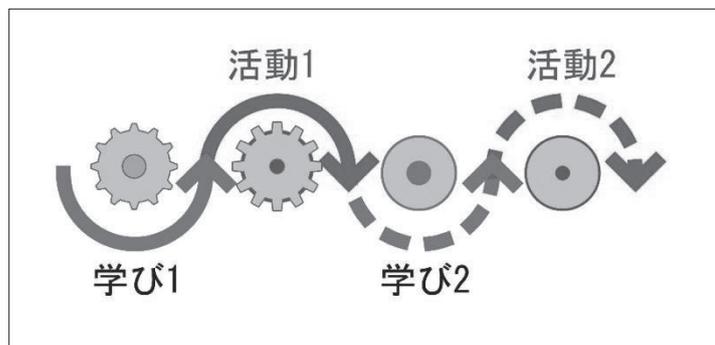


図8 学びと活動の連鎖循環のイメージ

4.2 入り口としての学習—目的から手段へ

研1のアンケート結果では、自己の興味や必要を感じるといった内的誘因が動機となった趣味、教養といった個人的ストック志向の講座選択がなされ、結果としては学びへの興味関心のさらなる広がりが見られるが、活動には直接的には結びつかないことが明らかとなった。学習自体が目的となっている。

手段と目的の観点から学習と活動を捉えると、①学習そのものが目的となる場合、②なにかをしたいといった行動・活動の具体的な目的を持ち、学習はそのための手段である場合、の二つがある。No7は当初から目的がはっきりしており、学習はそのための手段であるが、No9のように、学びの経過の中でやりたいことが見付き、学習のための学習から手段としての学習へと変化する場合もある。

したがって、学びが趣味や楽しみの場、あるいは参加そのものに意義を見出すといった学習自体が目的であっても、この学びの段階が行動への目的を見出す模索の準備段階と捉えると、意識下で潜在的にある目的に働きかけることができる。No3は地域課題を見出し、No6は役割を見出すことで、学習の場が新たな意味を持つこととなった。あらかじめ意識した目的だけではなく、社会や地域の課題意識をもつことが手段としての学習選択や活動の在り方に影響する。

No1は環境問題への関心から地球温暖化に向けての社会的課題・地域課題をテーマに活動を集約

させる経過において、関連する学習への焦点化し自ら活動組織を立ちあげるといったイノベーティブな経過をたどった事例である。No2も同様、地域の子供への教育（広義）の活動から「地域の人たちの居場所づくり」を目指す試みを重ねる。こうした場合は、例えば場所の提供やネットワークづくりのプラットフォームなど、目的の実現のための支援が必要となる。

学習期間中の学習方法、情報の提供の方法とその内容の工夫により、社会や地域への関心を高め、課題意識を持つことが前述の潜在的な活動意欲に働きかけ、活動への道筋となっていくのではないか。その際、インタビューで指摘されているように受講生の情報へのアンテナの高さも必要である。

このように学習への入り口戦略、出口戦略を意識することにより、入り口としての学習が大きな手段となり得る（図9）。

4.3 学習や活動のきっかけ—以前の経験・準備状態（レディネス）

学習や活動のスタートに当たっては、「たまたまの情報」が契機になることが見られた。（広報No2、チラシNo6、インターネットNo9）。何れも「たまたま」と語るが、その後の学習や活動の展開や継続の状況から、何かをしたい、しなければとの気持ち、これらの情報を鋭くキャッチし、すなわち活動が行われていなくとも学習を重ねていることや、問題意識を持つことが活動に向かう準備状況、レディネスを作り上げていると言えるだろう。

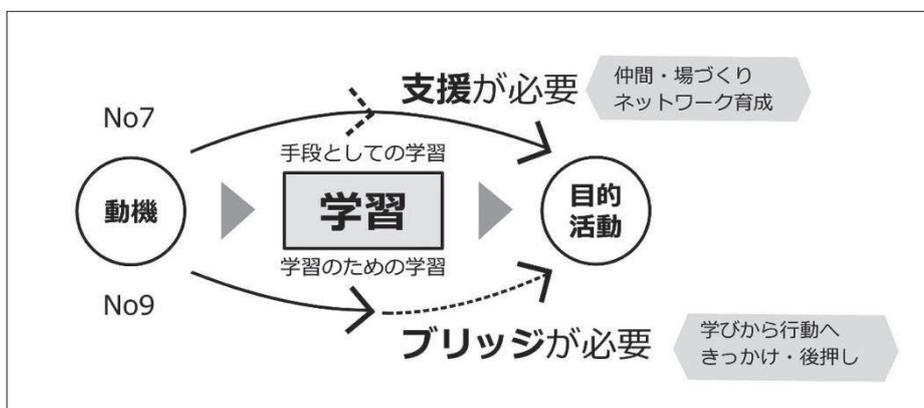


図9 入り口としての学習

表3 特徴語の一覧

No1	Jaccard係数	No2	Jaccard係数	No3	Jaccard係数	No4	Jaccard係数	No5	Jaccard係数	No6	Jaccard係数	No7	Jaccard係数	No8	Jaccard係数	No9	Jaccard係数
活動	.080	人	.105	人	.094	人	.064	人	.111	市	.107	勉強	.115	居場所	.070	活動	.140
環境	.070	子供	.082	市	.079	自分	.060	会	.087	活動	.105	相談者	.062	キャリア	.068	会	.135
地域	.066	地域	.082	ガイド	.067	学ぶ	.057	グループ	.068	受ける	.094	高齢	.060	男性	.065	地域	.106
子供	.065	楽しい	.046	来る	.061	チーム	.055	聴く	.057	講座	.093	受講	.059	自分	.064	大学	.091
つながり	.059	聞く	.042	行く	.059	センター	.039	行く	.055	コース	.088	聴く	.058	話	.064	入る	.085
グループ	.051	世代	.041	講師	.055	明かり	.036	非常	.048	人	.086	講師	.057	会	.064	仲間	.079
大切	.050	話	.041	大学	.044	児童	.036	先生	.045	多分	.085	会	.056	セカンド	.055	生涯	.076
作る	.048	昔	.037	全部	.043	周り	.035	ボランティア	.043	子育て	.077	自分	.056	カミさん	.050	学習	.075
海外	.048	参加	.037	講座	.039	元気	.035	仲間	.040	地域	.061	教える	.053	障害	.049	市	.073
情報	.041	作る	.037	仕事	.038	一緒	.035	話	.039	企画	.056	相談者	.050	大学	.046	知り合い	.070

一方、各事例が語る初期の学習や活動の選択には、以前のライフステージ（就業期、子育て期）において培われたものが大きく作用している。刺激に出会ったとき、それに触発されるつまり食いつきが起きるとき、わずかでも何らかの手掛かりや経験を持っている場合、学習や活動への一歩が踏み出しやすいということであろう。

海外生活で見たこと聞いたこと（No1）、職場での経験・技術（No2）、就業中の趣味（No5）、仕事の中で出会った課題（No7）、仕事における地域福祉的活動（No8）、仕事の一環としてのCSR活動（No9）、などが、学習や活動における考え方や実践に踏み出す手掛かりとなっている。こうした各ライフステージにおいて、それまでに得た知識や経験の重要性はいずれの年齢層にも言えることである。

本論文の対象者である高齢者は、とりわけ長年にわたる多様な経験、そこから得た知識、技術、情報がより豊かであり、活動へのレディネスが十分にありと見えよう。

4.4 人のつながりから活動へのつながり

表3は9名の語った特徴語の一覧である。活動開始や継続に当たって役に立った、あるいは求められることとして、「人」「つながり」「仲間」「参加」「一緒」という言葉が多くみられる。「大切なのは（学習の場の）人脈、つながりですかね」（No1）、「学習も活動も仲間づくりの意義、手ごたえがある」（No3）、「一人ではできなかった」（No4）、「活動が続くのは仲間意識、活動が楽しいから仲

間意識が芽生える」（No5）「学習の場への記憶意識を感じることで仲間意識となる」「活動していく中で、仲間になっていくような気がする」（No9）などである。

これらに関連して「居場所」の言葉もあげられる。受講生同士の交流の場で、「何をしたいのかわからないとき、おしゃべりすることで、自分の気持ちが見えてくる」「信頼感安心感があれば、ちょっとした後押しがあればつながる」（No6）などである。

また、そこで得られる「情報」や「身近な人の後押し」（No2）「第三者の後押し」（No5）が活動につながっていく。人とつながることで得た情報や仲間の後押しによって、会（グループ、組織）や地域とつながり、活動につながっていく姿が見られる。

なお、個人的な活動を続けるNo7や、気持ちがありながらはっきりした場所を見いだせないで模索しているNo8からは仲間、情報交換、交流などの言葉は見いだせなかった。

4.5 受講生が求めるもの

学習が活動につながるために求められることは何かの問いに対して、各自の学習・活動の経験から、講座提供者、講師、受講生自らというステークホルダーに対しての考え、意見が出された。自社経営の男性1名を除いて、リタイア組（男性5名、女性1名）は、講師に対して、教える・教わるという立場を超えての厳しい目を持つ。

「学術的な見識を持つ講師と実経験を持つ受講

生が、対等な立場で意見交換する時間が必要(No7)」「講師の役割は知識を伝えることではなく、いかに行動につなげるかである(No4)」「講師は講座の趣旨を理解し、情熱をもって教えるべき(No3)」などの内容である。

また、主催者に対しては、講座提供者としての明確な意識(意図)を持ちそれを伝え、講座趣旨に合った講師の選択、タイムリーな受講中の情報提供、受講生同士の交流の場や時間帯の提供、活動につながる実践的な学習の提供など、課題は多方面にわたる(No3、No4、No5、No6、No9)。

自分を含めた受講生に対しても、「目的・問題意識・動機を持った学習が活動につながる」「交流と情報交換」「アクティブに情報を捉えるアンテナ」などがあげられる。「インプットからアウトプットへ」「意欲のある学習が活動につながる」(No8を除く全員)など、受講生に問われる姿勢も厳しいものがある。

個別に行われている地域の活動をつなげるコーディネーター、情報を広めるインフルエンサー、受講生が学んだことを発信する場の提供、そして、受講生、講師、主催者による対等な立場での意見交換なども、活動への橋渡しになるとの考えが提示されている(No1、No7)。

4.6 高齢者が地域にかかわることの意義

研1で述べたように、人口減少時代、少子高齢時代において、高齢者が地域にかかわることの社会的意義は大きく、将来ますます期待されるであろう。高齢者自身にとっても活動を通じて地域へコミットしていくことには大きな意義がある。

高齢者の地域活動への参加に関しては、「まず元気でいればいい」「学習が地域での活動につながなくてもいい」「やりたい人がやればいい」と、比較的緩やかな考え方が多い。

一方、地域にかかわるのは、「働いているうちから地域に片足を突っ込むようなことをやっていると、退職してからでは地域に入りにくい」(No6、No9)と、現役時代からの地域とのかかわりの必要性

が述べられる。先に述べた、学習や活動に踏み出す第一歩とも関連して、現役時代の地域活動への参加や関心がリタイア後の学習や活動へのかかわりに大きく関係しているのではないと思われる。

リタイア後の特に高齢者男性は、「(リタイアによる)帰属感の喪失を、地域で学びや活動をすることで自らのアイデンティティを回復していると考えられる。地域の学びと活動は高齢者のアイデンティティ・ペグ機能を有していると思われる」(西田 2011:265-76)、と述べられるように、個人にとっての意義も大きい。

4.7 企業の役割

第4章第3節で見たように、働いていた企業での地域貢献活動の体験の有無が、リタイア後の活動にスムーズに移れるということが語られていた。リタイア後の地域へのソフトランディングにとって、以前の経験(企業等に所属して働いていた間の地域へのかかわりなど)が大きく影響していることが明らかとなった。

9名のテキストマイニングによる外部変数(社会活動経験のあり・なし)による共起ネットワーク図は図10のとおりである。

この図から読み取れることは、社会貢献活動の経験がありが、地域や活動に関する言葉や学習に関する言葉がやや多く、経験なしが受講や講座などの学びに関する言葉がやや多いことである。企業での地域活動の経験をした事例の方が、学習や地域に関する活動に参加する意識があり、未経験者は、学びに関心を持つ傾向があったと読み取れる。

5 事例研究からの提言

2021年度の研1では、アンケート調査結果による数量的な実態把握からの提言であった。2022年度の研2の本報告は、地域で活動する人のインタビュー調査結果の定性分析に基づく、学びや活動に関する提言である。研1の結果で得た仮説の実証的検証プロセスともいえる。

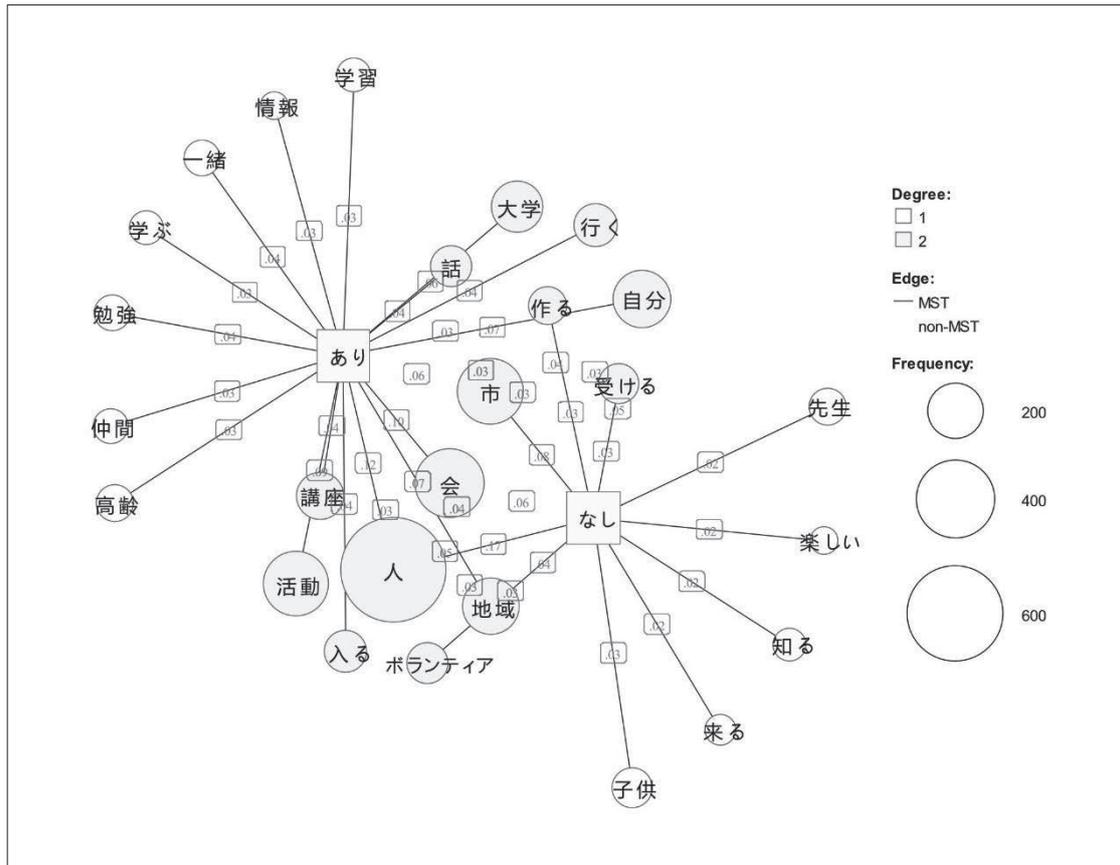


図 10 社会活動の有無による共起ネットワーク

5.1 プラットフォーム構築の提言

今回の事例研究により学習と活動間の流れの双方向性と多様性が明らかとなった。そして、各事例の語りを通して必要に応じて自由に出入りでき、行きたい時に行ける「居場所」が求められていることも明らかとなった。言葉を交わし情報を交わすことで「仲間」づくりがなされる「居場所」、自分のやりたいことに気づかされ、信頼できる仲間の後押しによって第一歩を踏み出すことができる「居場所」である。

そこでは、ニーズに応じて地域に密着した具体的かつタイムリーな「情報」が提供される。例えば、どのような活動や学習の場があるのか、今何が必要とされているのか、どこの誰が仲間を求めているのかなど地域の情報がワンストップで提供される。そして、地域の多様な資源を知り各活動組織などとのつなぎを行う「人」がいて活動に向けての支援が行われる。「物理的な場所としてのプ



図 11 地域のプラットフォームに必要な要素

ラットフォーム」であり、情報提供やコーディネートを行うなどの「機能としてのプラットフォーム」である（図 11）。

アンケート調査結果では、「学習によって得られたものは何か」の問いに「興味関心の広がり」と

ともに「知り合いの増加」と答えた者が際立って多かった。学習の場で得たこれらを継続させ、協働活動基盤となるプラットフォームである。

当研究では調査対象者を学びと活動を行う個人としていることから、個人間をつなげる仲間づくりの機能が多く言及されている。しかし、都市型住民や新住民が増えることで拡散化が想定される状況にあっては、自治会組織や地区協議会といった範囲を超え、また時には自治体枠を超えた越境的活動が行われることが多くなるだろう。その際、前述のプラットフォームの機能を構築することによって、自発的参加による新しい形の組織活動の展開が可能になる。急速に変化する社会、多様な課題を抱える地域においては、行政や企業、各活動組織、NPOなどの活動組織、市民が、それぞれの枠組みを超えて協働し、さまざまな課題の解決に取り組むことで、最大限の効果を上げていく「コレクティブインパクト」アプローチ（取り組み）が求められる。

特に、後に述べるように働く人が、就業時から地域にかかわっていくことを可能にする面からも、企業が地域に組み込まれていくことが重要と考える。将来的には、プラットフォームが単に人や既存活動（組織）をつなぐコーディネートしていく場と

してではなく、プラットフォーム自体が多様な力（財としてのマンパワーはもとより、専門的な知識、技術、進めるための資金など）を集約することで、相互補完と協働による大きな推進力を備え、地域の個々の課題を包括的に捉えた取り組みの場であることを望みたい。

5.2 講座提供者・講師・受講生に向けての提言

インタビュー調査対象の9名はいずれも多様な講座を受講しており、その経験から多くのことが語られている。

「講座提供者」に対しては、講座の狙いを明確に意識した講座の組み立てと受講生への説明、講師選択の適切性、実践的な学習方法の採り入れ、情報提供の在り方などの提言がなされた。それぞれの活動と学びが循環する中で、そのサイクルに合わせた選択ができるような講座設計が求められている。特に、世代を超えた協働による地域づくりの必要性とともに、世代交流の観点から具体的には若い時代からの地域への関心を高め、活動参加を促し、働いている人も参加できるような、夜間の講座開講やオンライン講座の提唱（No1）である。実践的な学習方法としては、（座学のみではなく）

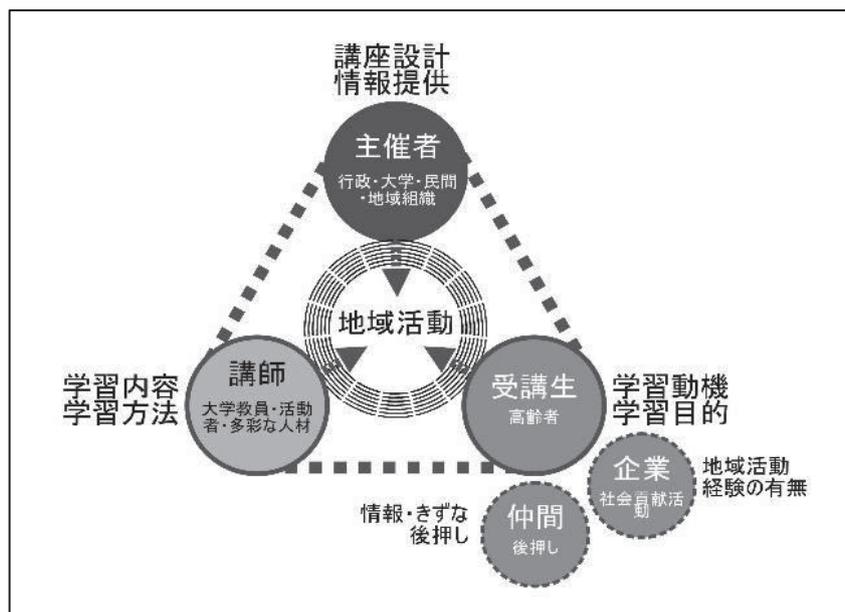


図 12 各ステークホルダの連携

受講生同士の意見交換の場があげられており、意図するところは次項のアクティブラーニングの提唱につながるものである。

「講師」に対しては、学習の中で相互に（対等な立場で）意見交換をする関係性が求められている。講師には理論があり自分たちには経験があるとの立場から、それらをお互いに合わせることでより意義のある内容になるのではないかと考えに基づく。

「受講生」については、目的や問題意識を持った学習姿勢への言及がなされる一方、学習から活動への移行に関しては、「アウトプットすべき」から「やりたい人がやればいい」まで、考えの幅が広い。

図 12 に示したように、受講生に関連して新しく浮かび上がってきた要素は、「仲間」の意義と「企業」の役割である。

「仲間」は、共通して取り上げられている学習参加の意義である。情報を交わし後押しをしてくれる「仲間」、「楽しくなければ続かない」活動の新たな発展や相互支援につながる「仲間」を得ることである。受講生は、学習の場で、これら横のつながりを獲得する。

また、講座修了生の学んだ場への愛着・帰属意識は強い。講師と受講生の関係が、講座終了後も何らかの形で継続され、活動から生まれた新たな課題に対する知識や助言を得ることができれば、学びの場は学びと活動の循環における自発的な「学び直し」の場となる。そして、コーディネーターとなる人材の長期的育成にもつながるものと考えられる。

講座設計に当たっては、「講座の場」は講座終了後もこのような横のつながりと縦のつながり持続する場でもあるとの認識の下、その「機会と場」の提供が今後の生涯学習の課題であるにとらえることが必要ではないだろうか。

そして、就業時代の地域と関わった経験・内容が仕事を離れた後の学びや地域での活動とつながるとともに、地域との関わりやすさにもなっている。こうしたことから、リタイア後のウェルビーイングとして「地域にかかわり続ける」観点から、

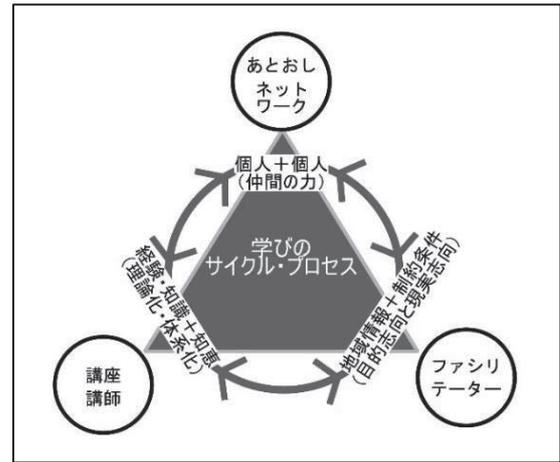


図 13 アクティブラーニング・プラス

人材育成や企業の社会貢献 CSR を考えていくことが必要ではないか。この点については後の項で詳細に述べる。

5.3 アクティブな学びの導入

活動に結び付く授業として、実践的な活動を伴い受講生同士が意見を交わす授業、そして講師と受講生が対等な立場で意見交換を行う授業形態があげられた。アクティブラーニングを経験していないであろう各事例から述べられた、まさにアクティブラーニングそのものの提言である。実践から高齢者に実施する場合と学生に行う場では明らかな違いが見られる。それは図 13 に示すように、アクティブラーニングのプロセスにおいて、①高齢者が重ねてきた経験や知識が授業（講師）により体系化・再構築され、②それぞれの持つ技や知恵を合わせたパワーとなり（ネットワーク）、③諸情報や社会的諸条件を踏まえた現実路線に向かって活かされていく過程をたどることに、学びの特徴が見られる。経験知を活かすこと、具体性を伴う方向付けなどにおいてファシリテーターとしての講師の難しさがある。多様な個性を活かしながら共通項を見出していかなければならないプロセスを受講生と共に辿るファシリテーターの難しさである。

筆者らはこの学習プロセスをアクティブラーニング・プラスと名付け、学びと活動の循環を目指

す講座設計における意義を明らかにしてきた(井上・大久保・古本 2021) (井上・大久保 2023)。

アクティブラーニングの定型はないといわれているように、テーマによっても講座設計が変わるであろうし、また高齢者ゆえの様々な課題も多く伴う。一方、講師と受講生の相互作用によって常に再構築されていくことで、多様な意図、問題が混在する現場においてより実用性のある学習方法となる。

各講座でのアクティブラーニング・プラスの採り入れを提唱する。

5.4 現役世代からの地域活動—企業の役割

現在 65 歳以上の高齢者が就業していた時代には、企業による社会貢献活動は多くなかった。先述のように、インタビューからわかったことは、就業時代の地域と関わった経験がその後の活動のしやすさに結び付くことである。

東京都がまとめた「企業が進める社員のボランティア活動に関する事例集」(東京都生活文化局

表 4 東京都事例集の企業

記号	規模	業態
A社	大企業	家電・IT
B社	大企業	IT (機器・プログラミング)
C社	大企業	IT (機器・プログラミング)
D社	大企業	日用品メーカー
E社	大企業	サービス (保険)
F社	大企業	家電・IT
G社	大企業	サービス (服飾)
H社	大企業	IT (機器・プログラミング)
a社	中小企業	IT (プログラミング)
b社	中小企業	サービス (理美容)

2018) で分かるように、企業と従業員の地域貢献活動、つまり企業自らが得意とする技術やノウハウを活かした貢献、直接的な支出を伴う貢献(寄付など)、従業員の自主的ボランティア活動に対する支援など多くの事例が見られる。

表 4 (企業名は匿名化し、規模と業態は筆者記入) で示す 10 社の社会貢献活動の事例報告をテキストマイニングした結果が図 14 である。社会貢献活動、運営の仕組み、制度、目的、事例などに関する言葉が多くみられ、企業と従業員が一体となって社会貢献活動に取り組んでいることが読み

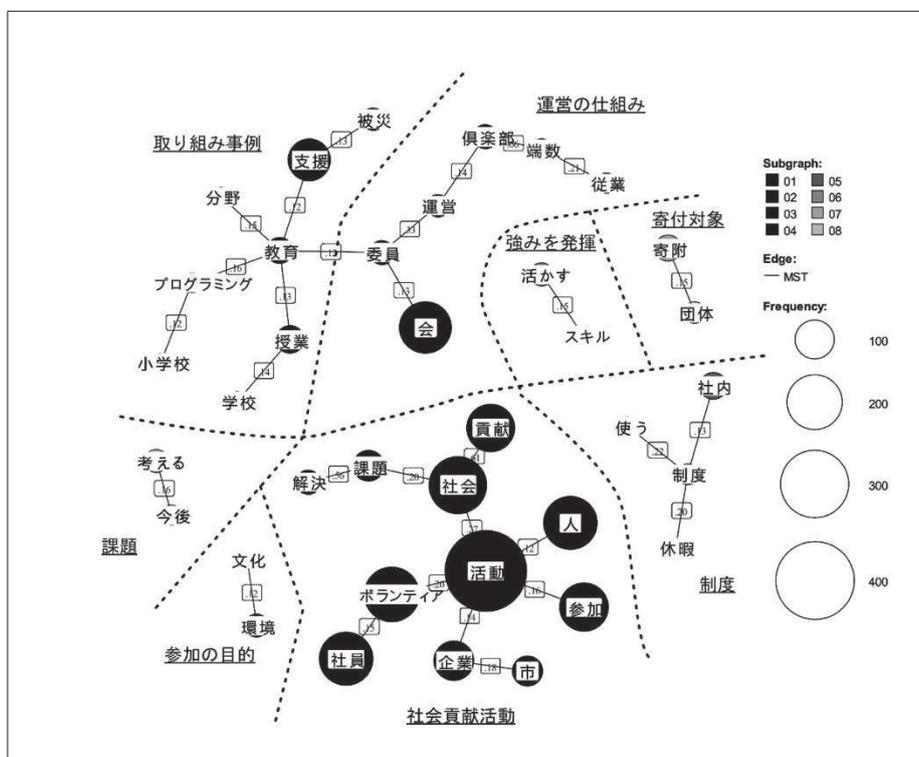


図 14 東京都事例集の共起ネットワーク

取れる。そして社会貢献は地域環境や文化面だけではなく、教育場面に大きな関心が寄せられている。

一方、「令和4年版高齢社会白書」（内閣府、令和4年6月14日公表）において、「令和3年の労働力人口比率（人口に占める労働力人口の割合）を見ると、65～69歳では51.7%、70～74歳では33.2%となっており、いずれも平成17年以降、上昇傾向である。75歳以上は10.6%となり、平成27年以降上昇傾向となっている。」（同白書：21）と述べられているように、高齢者のリタイアする歳がより高齢化する傾向にある。一方で、「希望者全員が65歳以上まで働ける企業は80.4%」（同白書：25）、「働けるうちはいつまでも働きたい60歳以上の者が約4割」（同白書：23）という状況を見ると、地域活動に取り込むことができる高齢者数や活動期間が減少する懸念がある。

したがって、企業が、環境活動やボランティア、関連団体への寄付や寄贈、教育・啓蒙活動など、さまざまな方法による社会貢献活動を通じて、従業員の地域社会への関心を高め、地域活動を実践する機会を提供することが求められる。コロナ禍における新しい働き方として注目を集めてきたテレワーク制度は、働く人の関心と動きを地域に向かわせている。既に行われてきたボランティア休暇制度などとともに、これらの制度の充実などリタイア後の個人にとって積極的な地域活動の意欲を高める可能性として検討されるべき課題と考える。

現在、産・学・官連携が叫ばれる中、地域活性化を目指す官と学の連携が積極的に進められ広がりを見せている。同様に、地域活性化に資する人材育成や地域コミュニティ活性化の観点から、行政の舵取りにより地域に根差す企業との連携に視点を当てた取り組みを進める必要がある。

6 おわりに

本稿においては、少子高齢社会における地域にとって、高齢者はコミュニティ維持、地域活性化

における貴重な財であると捉える。したがって、多くの高齢者が受講している学習というインプット行為は、少なくとも活動というアウトプットにつなげたいと考える。しかし、高齢者の学びへの関心・意欲が高く、活発な参加がなされているものの、地域に向かう活動につながりにくい現状にある（研1）。こうした高齢者をプロダクティブエイジングの観点から捉え、学びから活動への橋渡しをテーマに地域での活動を行う9名を対象に聞き取り調査を実施した。学びと活動が相互に影響しあう双方向性の流れにおいて、求められた講座提供者、講師、受講生への提言はすべてアクティブラーニングにつながる要素であった。筆者たちの経験に基づき提唱してきたアクティブラーニング・プラスの意義が実証された形となった。

学習に限らず、地域の中の居場所、そこに参加し仲間を得ること、情報を得ることが、プラットフォームとなり次の一歩への後押しとなることが語られた。

地域で活動する人たちの語りの中に現れたキーワードは、人々の「ウェルビーイング」の状態を評価する要素「PERMA」²⁾ そのものであった。目的をもって学び結果を地域に活かそうと試みる各事例は、まさに地域で暮らす人々すべての人のウェルビーイングにとって何が必要かを捉えている。地域活動通じての社会への寄与は自分らしく豊かに新しいステージを生き抜くためのアイデンティティ再構築とその実践、そして確認のアクションでもある。

2年間にわたり続けてきた調査研究と実践に基づく提言が、その一部でも活かされることを望んでいる。

【謝辞】

インタビューを快諾していただいた9名の方々、事例紹介で協力していただいた三鷹市市民協働センター、杏林大学社会人教育の修生でインタビューアールとして協力いただいた山野希実江氏と虎谷雅年氏、そして、テープ起こしから記録整理に当たり多大な労をいた

いた上野皓輝氏、テキストマイニングを含む分析や論文作成に際して貴重なアドバイスをいただいた亜細亜大学の有末賢先生と大正大学の仲北浦淳基先生、ならびに三鷹ネットワーク大学事務局、行政の観点からご助言をいただいた垣花三鷹市生活環境部調整担当部長と高松スポーツと文化部調整担当部長、これら多方面にわたる諸氏に感謝申し上げます。

【注】

- 1) 方法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした。
- 2) Positive Emotion (ポジティブ感情)、Engagement (エンゲージメント)、Relationship (関係性)、Meaning and Purpose (人生の意味や仕事の意義、および目的の追求、Achievement/ Accomplish (何かを成し遂げること) 出典: https://www.kaonavi.jp/dictionary/positive_shinrigaku/ 一般社団法人日本ポジティブ心理学会

【文献】

- 井上晶子、大久保隆、古本泰之、2021、「高齢社会人向けのアクティブラーニング科目の成果と課題—「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」での学習と実践活動を通じて—」、『観光ホスピタリティ教育』第14号、p2-17
- 井上晶子、大久保隆、2023、「プロダクティブ・エイジングに向けての生涯学習」～アンケート調査と事例研究を通して～、“Kyorin University Journal” 第40巻
- 大久保隆、井上晶子、小高格、2022年、「地域活性化に寄与する生涯学習に関する調査研究—高齢者のアクティブラーニングの意義を巡って—」、『三鷹まちづくり研究』第2号、p11-40
- 岡本秀明、2009、「高齢者のプロダクティブな活動への関与とwell-beingの関係」、『日本公衆衛生雑誌』第56巻
- 神原理、2015、「川崎市民の地域意識と生活満足度」、『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』、第1号

- 東京都生活文化局、2018、「企業が進める社員のボランティア活動に関する事例集」
- 内閣府、2022、「令和4年版高齢社会白書」
- 西田厚子、2011、「定年退職者のアイデンティティ再構築—退職者ボランティア活動をとおして—」、『日本家政学会誌』、Vol. 62、No. 5
- 前野隆司、2022、「ウェルビーイングとは何か」、『情報の科学と技術』、72巻9号

【参考文献】

- 敷田麻実、森重昌之、中村壯一郎、2012「中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必要性とその構造分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）第24巻、P23～42
- 末吉美喜、2019、『テキストマイニング入門—Excel とKHCoder でわかるデータ分析—』、オーム社
- 樋口耕一、中村康則、周景龍、2022、『動かして学ぶ！ はじめてのテキストマイニング』、ナカニシヤ出版
- 樋口耕一、2020、「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版」、ナカニシヤ出版
- 樋口耕一、2004、「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」、『理論と方法』、(数理社会学会) 19(1)、p101-115
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (JILPIT)、2019年、「生涯現役を見据えたパラレルキャリアと社会貢献活動—企業人の座談会 (ヒアリング調査) から—」 JILPT 資料シリーズ No. 215

【参考 URL】

- 樋口耕一、2021-2023、「使用許諾、KHCoder のライセンス」、(2023年2月1日取得、
<https://kncoder.net/license.html>)

プロフィール

大久保 隆（おおくぼ たかし）

一級建築士。建築学専攻修士（日本）および工学構造学修士（英国）を取得。建築設計業務を定年退職後、大久保&建築アトリエを主宰しながら、杏林大学社会人講座の受講をきっかけに、「おむすび倶楽部友の会」「Corekara（コレカラ）みたか」の代表として地域活動を継続している。

井上 晶子（いのうえ あきこ）

博士（観光学）。埼玉県部長、川越市副市長を経た後、立教大学博士課程において学位取得。現在は立教大学観光研究所特任研究員、杏林大学特任講師として研究・教育に携わる。主な研究テーマは、「観光価値の持続」「地域活性化」「組織とリーダー」「高齢者の生涯学習」など。
